

東ドイツ（DDR）成立期の政治犯問題 －メラーとケーラー夫妻の場合－

ヨーロッパ研究センター客員研究員

近 藤 潤 三

1. 手記・証言の意義と留意点

ドイツ統一から20年が経過した2010年に筆者は『東ドイツ（DDR）の実像 独裁と抵抗』と題する一書を公刊した。そこでは東ドイツの支配体制に照準を合わせたが、しかし一般に行われているようにシュタージを中心とする政治的抑圧の構造面から接近する方法を採らなかった。むしろ政治犯などとして抑圧された生身の人間の側に視点を据え、生きられた現実として支配体制を描くというアプローチを選んだのである。

そうした観点から、その著作では無実なのに処刑された政治犯、挫折に終わった若者たちの抵抗運動、ベルリンの壁の失敗した越境者、拉致されて殺害された被害者などに照明を当てた。またその際、本人や関係者が残した記録を主要な素材とし、同時に、それぞれについて複数のケースを検討の俎上に載せた。事例が一つだけなら例外的ケースという可能性が残るし、多くの例をとりあげれば個々人にとっての重い意味が希釈されてしまうことになりやすいからである。そうした文脈では、どのケースに光を照射するか、そしてどのケースは明示的に論及せず、背景の中に沈めたままにしておくかという選別が極めて重要な問題になる。この点に留意し、事例選択の適切さに関して著書では次のように記しておいた。「もちろん、本書の中で登場する人物よりも一層主題に適合した人物や事件が存在する可能性が残っているのは当然といわねばならない。またその反面で、はるかに多くの人々の記録が本書では論及されず、結果的に黙殺される形になっている。しかし、それは無視を意味するのではなく、それぞれの事例の意味付けの際に論及する社会的文脈の中にいわば匿名のまま埋め込まれているのであり、可能な限り視野に収めて活用していることも付言しておきたい」（近藤（a）34）。

このような考慮に基づいて、拙著の公刊後も様々な資料に目を通してきた。またそれと並行して、東ドイツ成立期に重心を置き、政治的暴力の象徴ともいえる特別収容所体制の成立から解体までを扱った論考や、政治的圧迫のため自立した政党から衛星

政党へと変質していくキリスト教民主同盟の軌跡を辿る論考を発表した。そうした作業を進める過程で、二つの興味深い手記に行き当たった。一つは、手元に集めてあった資料類の中から出てきたもので、1999 年に出版された S. グラープナー /H. レーダー /T. ヴェアニック編『ポツダム 1945-1989 適応と反抗の間』である (Grabner/Röder/Wernicke)。そこには東ドイツを生き抜いた 25 人の無名の市民の手記が収められている。しかし、著作自体の目立たない標題と同様に、それぞれの手記にも「私はもう何も信じない」、「誰も私たちを望まなかった」のように漠然としたタイトルがつけられているために関心を引かず、迂闊にもこれまで見過ごしてしまう結果になったと思われる。また管見の限り、従来の研究でこの書に言及しているものは存在しないが、その理由の一端は、同書がブランデンブルク州政治教育センターの刊行物で非売品であるため、多くの人の目に触れなかったことにあると考えられる。本稿で焦点に据えるのは、そのなかに収められているケーラー夫妻に関する手記である。

もう一つは、シュタージの悪名高い収容施設があったバウツェンで毎年開催されているバウツェン・フォーラムでの証言記録である。24 回目になる 2013 年のその席ではかつて政治犯とされて苦しんだ 4 人の市民が体験を語ったが、そうした体験談は今ではシンポジウムと並ぶフォーラムの重要な一部になっている。しかし、シンポジウムには主要な研究者が参加して関心を呼びやすいのに反し、体験談は「時代の証人」とされているだけなので注目を集めにくく、素通りされがちだったのは否定しがたい。また、前記の著作と同様に、バウツェン・フォーラムの報告集も主催者であるフリードリヒ・エーベルト財団ライプツィヒ事務所から非売品として発行されていて、一般の書店には並ばないため、目にしたことのある人はかなり限られていると推察される。そのなかから本稿ではハラルト・メラーの証言に照明を当てたいと思う。

これらの手記や証言録には、収録した著作の平凡に見える体裁とは裏腹に、過酷な体験や厳しかった現実が経験者や関係者ならでは語り口で綴られており、東ドイツに関する貴重な記録になっているといえる。1953 年 6 月に起こった労働者の反乱や 1961 年 8 月のベルリンの壁建設のように東ドイツの通史ならば必ず触れられている出来事は、たしかに今日では周知の事柄として知識としては共有されている。もちろん、西ベルリンのメイン・ストリートが反乱にちなんで 6 月 17 日通りと改称され、この日が西ドイツの国民的記念日とされたのに反し、国家としての東ドイツでは 50 人以上の死者を出したこの大規模な反乱すらもみ消され、タブー化されたことに注意する必要がある。例えば東ドイツで育った現在のザクセン州首相 S. ティリッヒがベルリンの壁崩壊直前の 1989 年秋に初めて 1953 年 6 月 17 日の出来事を聞いたと証言しているのは (Eisel 7)、その結果にほかならない。けれども、東ドイツが消滅して

そうした事態が解消されたとしても、歴史の一齣としての記述ではそれらがその社会に生きた人々にとって有した意味や重みまでも察知することは難しく、表層をなでるだけに終始しがちなのは否定しがたい。その意味では、経験に即して抑圧の実態を描き、年表的な記述や構造的な分析を補っている点で、上記の書は東ドイツについての理解を深めるのに恰好の著作と呼んでよい。

無論、他方では手記に通例の欠陥が存在することも指摘しておく必要がある。E. アールベルクの言葉を引きつつ拙著で述べたように、何よりも事実として記述されていることの真偽や一面性のような疑問点を検証することができないのは最大の難点であろう。さらに主題の脈絡で言及されるべき事柄が素通りされ、叙述に断絶が見られることや、説明の不足な個所や白紙状態に近い部分があること、個別の事例から一気に一般論に飛躍するなどの問題点が随所に見出されることなども主要な難点に数えられよう。これらに加え、単純な記憶違いから始まり、書き手の立場から見て不都合な事柄の黙殺ないし隠蔽や好ましいことの誇張などもあることを想定して慎重に接しなければならない (近藤 (a) 136f.)。それにもかかわらず、いや、それだからこそ冗長な部分も含めて記述が起伏に富み、感情の波が看取されるのは、手記という記録の長所であり、大きな魅力でもあるといってよい。努めて冷静に経験を書きとめようとしながらも、叙述に断絶や飛躍が生じていることは、欠陥であるだけではなく、見方によっては利点でもあると考えられるのである。このような視点から、史実に照らして間違いだと見られる個所を修正し、説明不足の部分を可能な範囲で補いながら、できるだけ手記に寄り添うことにしよう。その上で、これらの手記から何が読み取れるかを考察することにしたいと思う。

2. ハラルト・メラーの場合

最初にバウツェン・フォーラムでのメラーの証言に目を向けよう (Möller (b) 92ff.)。

ハラルト・メラーは1928年に生まれた。生地はテューリンゲンとヘッセンの境界に近く、テューリンゲン側にあるウンターマスフェルトという町である。同地に隣接し州境沿いにあるファヒャという小さな町で成長し、戦争末期に少年兵として軍務についた。1944年9月にヒトラーは16歳から60歳までの男性による国民突撃隊を結成する命令を出したが、メラーの軍事動員がそれによるのか否かははっきりしない。確かなのは、しばらく文化財の疎開を手伝い、その後、戦車部隊に配属されたが、すぐに病気になって野戦病院に収容されたことである。まもなく訪れた敗戦の時点で彼

は17歳であり、ごく短い期間アメリカ軍の捕虜になった後、釈放されて故郷に戻った。

最初にテューリングェンに西から侵攻したのはアメリカ軍であり、3月末から4月16日までに全域を制圧した。ヤルタ協定で合意され、6月5日の連合国の会議で再確認された境界線までアメリカ軍が撤退したのは1945年7月だった。例えばウンターマースフェルトに近く、バッハヤルターにゆかりの深いアイゼナハは4月6日にアメリカ軍に占領され、7月2日に引き揚げたから、約3ヶ月間アメリカ軍が軍政を敷いたことになる。ただその軍政は現地の行政機構を存続させたものであり、暫定的にこれを指導したのがブーヘンヴァルト強制収容所で抵抗組織を構築した社会民主党幹部H.ブリルだった点には注意する必要がある。彼は反ナチのために共産党とも提携したが、ソ連軍への占領交代に伴い、7月16日に解任された（Wahl 5, 8）。

メラーが戻ったのはまだアメリカ軍が町を占領していた時期だった。アメリカ軍は軍政を実施するに当たり、一般の兵士たちに対してドイツ人住民と接触するのを禁じていたが、厳守されなかった。そのことは、食糧などアメリカ軍の豊富な物量の一部が闇物資として各地の闇市などに流出したことや、軽蔑と羨望を込めて「アメ公の愛人」と呼ばれたドイツ人女性との交際などから明らかになる（Flemming 27; 高橋 178f.）。メラーの場合は男性だったにしてもその一例であり、彼はアメリカのある兵士と親しくなり、一緒に散歩などをして英語の力を向上させることができたという。ある日、その兵士は近くアメリカ軍が撤退し、代わりにソ連軍が来ると告げた。また裁判所に勤務していた父親にもそのことを話し、ソ連支配下では厳しい事態になるから、メラーをアメリカ占領地区に引き取ってもよいと申し出た。けれども、彼は一人息子だったので、父親はこれを断った。

7月になるとファヒャにソ連軍が進出してきた。ソ連軍に関しては、ナチによる下等人間というスラブ人蔑視の人種主義的プロパガンダに加え、ドイツ本土に侵攻して以来、ドイツ民間人とりわけ女性に対する無数のレイプのほかに略奪や暴行が多発したから（近藤 (e) 114f.）、ファヒャの住民の間でも恐怖心が広く存在していたと推察される。一例として、戦時期にドイツにとどまった笹本は回想記でソ連軍に対するドイツ軍の頑強な抵抗に触れ、「その主な理由は『ソビエト軍の捕虜になればシベリア行きだ』という宣伝が行きわたっていたことにあるし、反対に『アメリカ軍ならそうひどい目には遭うまい』というドイツ兵の気持ちも強かったであろう」と記している（笹本 201）。この点は戦争末期のドイツ軍兵士の野戦郵便を調べた小野寺によっても確かめられているが（小野寺 (a) 180f.）、ここに書きとめられた米ソに対する正反対の心理は国防軍の兵士だけでなく、民間人にも共通していたと考えて大過ない。それにとどまらない。ソ連軍に対する恐怖には現実的根拠があった。この点に

つについてはファヒャと同じテューリンゲン州の文化都市ヴァイマルについての西の報告が参考になる。「ある日アメリカ軍が撤退し、ソ連軍が進駐してきた。彼らはもう没収する物のないのにいらだって、市民から時計などをまき上げた。彼らは銃剣を突き付け、『ウーリ、ウーリ』とどなった。ドイツ語の時計がなまって『ウーリ』というわけである。そしてまた私の友人マルチヌがベルリンで経験したようなことがここでも起こった。」見境のないレイプがそれである (西 37)。

一方、ソ連軍の町への進出と同じころ、学校が再開した。これを契機にして以前の同級生が再び集まり、小さなグループが形成された。ナチ時代と比べた授業の様子や生活上の困難などにメラーは触れていないが、日本と違っていわば本土が戦場になった総力戦敗北後の全般的混乱に加え、異国の軍政下におかれたことによる困難は大都市ほどではなくてもやはり深刻だったと推測される。

ソ連軍はファヒャに到着するとアメリカ軍の占領地区であるヘッセンとの境界を遮断し、厳重な監視下に置いた。それによりヘッセンと緊密に結びついていた町は分断されたのと同様の状態になった。アメリカ軍が駐留していたときにはジャズをはじめとする新たな文化に接し、占領下にもかかわらずナチ時代よりも遙かに自由な空気が漂っていたし、とくに青年にとっては若いアメリカ兵士は自由そのもののよう映った。ソ連占領地区に限っても、戦争による死者、行方不明者は総数で 300 万人に達するともいわれるように (Foitzik 7)、家族や身近な人々を含めて戦争で多大の犠牲を払ったが、夫、息子あるいは父親の死による悲嘆や既成の権威の崩壊に伴う茫然自失に加え、敗北と占領による失意・屈辱などを考えるなら、「我々は自由だと感じ、自由に考え、何をしてもよく、何でも言うことができた」というメラーの言葉は俄かには信じがたいように思われる。青年たちはナチ体制下でヒトラー・ユーゲントに組み込まれ、全員が洗脳されたのでもなくナチ・イデオロギーに感化されて成長していたから (原田 217ff)、この言葉が示唆するように、アメリカの軍政が屈服よりはむしろ解放として受けとめられていたことや、ナチ期に身につけた「イデオロギーが戦争が終わるとカードの家のように崩れた」と述懐しているのは、注目に値する事実であろう。無論、K. コルドンの小説『初めての春』(邦訳『ベルリン 1945』)で、ベルリンが陥落した際に生き残りのユダヤ系女性が労働者家族の 12 歳の少女に接して洩らした、「ヒトラーが 12 年かけて残したのは瓦礫の山だけではないわ。・・・人の精神まで壊してしまった」という慨嘆には現実味があることや (コルドン 306)、他方で、制圧した連合国側が「人狼 (Werwolf)」と名付けられた地下組織の一員としてナチに忠実な若者たちが占領軍に対してテロ活動に出ることを真剣に恐れたのを見落とすことはできない (Bessel 175f)。一部の青少年に過酷な弾圧が加えられたの

はその結果だったのである（Wiener; Priess）。けれども、メラーの言葉のほかにも、ナチ・イデオロギーが実際には若者の間にそれほど深くは浸透していなかったことを窺わせるいくつかの証言があるのも事実である。ともあれ、メラーの場合、敗戦直後の混乱期であったにもかかわらず、同級生の多くがアメリカの統治するヘッセン側に住んでいたので、ドイツ人警官が配置されて監視が厳重になるまで、ソ連軍に把握されていないルートを通してダンス・パーティーに出かけ、女性とも交際することができた。それに比べると、ソ連側での暮らしは窮屈であり、娯楽もなかった。初めての夏を迎え、瓦礫の荒野となったベルリン郊外の湖で若い女性たちが水浴びに興じ、その傍らに木の枝を組んだドイツ軍兵士の粗末な墓標が立っている写真は有名だが（Plato/ Leh 52）、戦時下で封じられていた憩いや娯楽への渴望を表している点で、メラーの回想にはそうした情景を彷彿させるものがある。

アビトゥアを取得するとメラーは教師になることに決め、1947年8月にアイゼナハの教員養成学校に進んだ。進学して間もなく、イエナ大学で神学を学び始めた同級生から大学祭に来るように誘われた。イエナに出かけて交流が始まった人からメラーはある相談を受けた。メラーが境界を頻繁に行き来していることを聞き及んでいたその人物は、どうしたら西側から新聞を持ち込むことができるかと尋ねたのである。これにどのように応じたかをメラーは明確に記さず、それに伴う危険をよく考えることなく率直に語り合ったと述べているだけである。

その当時、メラーの母はグライツにいる叔父の許に身を寄せていたが、夏用の衣類をもって来るようにと頼まれた。それは1948年4月のことであり、ソ連代表が連合国管理理事会から退出して米ソの対立が険悪化していた時期だった。4月21日に二つのポストンバッグに衣類を詰めて母親のところへ届けようと駅まで行った時、二人の男に呼び止められ、ハラルト・メラーかと尋ねられた。そうですと答えると、一人が叔父と面識があり、たまたま車があるので連れてくるように依頼されたと告げた。その言葉を信用して車に乗り込むと、世間話の合間に西側の新聞のことや、頻繁に西側に出かけているかどうかなどを訊かれた。これに対し、自己の身辺に危険が迫っているとは微塵も感じていなかったメラーは、西から新聞を持ち込んだことなどをありのままに答えたのだった。

車が止まったのは、人民警察と記された標識のある建物の前だった。そのときにもメラーはまだ危険を察知できなかった。叔父が税務署に勤務していたので、それと何らかの関係があるものと想像したという。しかし、二人の男はそこで突然、「君は逮捕された。車を降りろ」と命じた。だが、逮捕など全く予期していなかったメラーは最初は悪戯だと錯覚し、笑ってしまった。すぐに彼は警察署内に連行され、女性警官

の前に立たされた。事態が飲み込めなかったメラーが女性警官に説明を求めると、「黙れ」と一喝され、やっと状況が少し理解できるようになった。

しばらくして二人の男がソ連軍将校とともに現れた。二人はメラーを引き渡し、彼は二人の将校による取調べを受けることになった。「どこにお前の武器があるのか」、「どんなスパイとしての任務を与えられているのか」、「どの橋をお前は爆破することになっているのか」。こうした質問を浴びせられたメラーは、「私にはわかりません」、「何のことを話しているのか理解できません」と応じるのみだった。またメラーはすべての衣類を脱がされ、ピストルなどを所持していないかを調べられた。その瞬間にすべてが終わったとメラーは感じた。これから何が起こるか彼には見当もつかなかった。

やがて彼は左右をソ連将校に挟まれ、窓を遮蔽した車に乗せられた。着いたところは大きな建物の中庭だった。それがどこかはわからなかったが、後にヴァイマルの裁判所だったことを知った。そこから彼は収容施設に連行され、地下の監房に入れられた。そこは地面がむき出しで、頭に白い包帯を巻いたように見える一人の男がいた。すぐに包帯に見えたのは白い袋で、目の上にかぶっていたことがわかった。房内は眩しいくらいに明るかったからである。その夜は我が身に起こりうることを考えて一睡もできなかった。翌朝、彼はメラーにここからはもう出られないと告げた。その男はナチ体制下で労働戦線の高位の指導者だったとのことであり、ナチ関係者と無実の若者が同じ抑圧を受けている理不尽さを垣間見ることができる。

この収容施設では毎晩取調べが行われた。日中は監房で地面に横になってはならず、座ることも禁じられた。そのため監房内で絶えず歩かねばならず、また常に監視されていた。夕方になると錠の音が鳴り、監視人がやってきて「姓名を名乗れ」と命じた。それが点呼の代わりであり、「メラー」と告げて監視人が「ニュット」と応じれば、その夜は取調べがないことを意味し、小さな幸運を感じることもできた。しかし「アメリカのスパイ」、「ファシスト」と罵られて監視人から暴行を受けることもあった。

取調べではアメリカからどんな任務を与えられたか、どの橋を爆破することになっていたかを白状するように強要された。メラーが境界を越えて頻繁にアメリカ占領地区に出かけていたことが把握されており、それがスパイの容疑につながっていたのである。メラーには何も知らないと答える以外になかったが、それに対して将校は、よろしい、それではそこに座っていると命じ、夜通し彼は椅子に座っていなくてはならなかった。将校は彼の目の前で食事し、煙草をふかし、女性通訳といちゃついていた。取調べの際の暴力についてメラーは触れていないが、これについては数多くの証言があり、とりわけ女性の場合には性的虐待が横行していたとされている (Räbiger 31)。

メラーが監房に戻されたのは起床時刻の直前であり、すぐに平常のサイクルが始まった。改めて指摘するまでもなく、それがソ連内務人民委員部（NKWD）が常套手段としていた悪名高い睡眠剥奪であり（アプルボーム 178f.）、連日続けばこの拷問に耐えることは不可能だった。ソ連軍の満州侵攻の際にスパイ容疑で逮捕された内村剛介も同様の経験をした。「訊問の呼び出しは夜中の11時ごろ、・・・訊問から独房へと帰ってくるのが午前3時ごろ。起床は5時だ。だからもう幾夜も眠っていない。ベッドに横になったかと思うと「起床!」だ」。こう彼は手記に記している（内村 21）。また将校が白状すればいつかは出られると語った点でも共通だが、違うのはメラーには同房者があったことである。その男は、取調べの将校にも将校としての誇りがあると聞かされたことをメラーに話した。その一方で取調べが14日間も中断するほどメラーはソ連兵士によって激しく殴られもしたのである。

因みに、内村は取調官について次のように書いている。「取調官は全権を持っている。全権？ そうだ。直接手をかけて射殺することが許されていないだけだ。あとは何をしようと、取調官の思うままだ。独房へ入れる。懲罰房へ入れる。散歩へ出す。出さぬ。眼鏡を取り上げる。減食させる。何でも彼の思うままなのだ。彼が考えた通りの自白を引き出すためとあれば、何をしてもいいのだ」（内村 32）。メラー自身は取調べの担当者に関して詳しく記していないが、1931年生まれで1948年にスパイ容疑で逮捕されたK.ピッケルの証言など他のケースを考え合わせれば（Pickel 13ff.）、内村のこの指摘はメラーの場合にも当てはまると考えて大過ないであろう。ともあれ、様々な圧迫をかけられてメラーは屈服し、自白することを決心した。ただ何を白状してよいか分らなかったため、将校に対してあなたが望むとおりのことを調書に書くように求めた。すると将校はロシア語で調書を作成した上で、メラーに署名するように要求した。これに対し、ロシア語を読むことのできない者には署名することはできないと応じたが、ソ連の人間、とくに将校を信頼せよと主張し、調書には確実なことが書かれているのだと言い張った。こうしたやりとりを経てメラーは自分では読むことのできない調書に署名したのである。

その後、メラーの監房に訪問者があった。それは金モールのついた軍服を着たソ連の将校で、軍検察庁の者だと名乗った。彼はメラーの前で起訴事実を読み上げた。それによると、メラーは道路や広場でまるで「テューリンゲンの小ゲッベルス」のように反ソ・プロパガンダを行い、橋を爆破したといわれ、そのほかにも様々な任務を帯びていたとされた。2・3週後には兵士に引き立てられて軍事法廷に立たされた。法廷の前では2人の兵士がカラシニコフを構えており、中では赤旗を立てたテーブルに将校たち6人ほどが着席していた。既に聞かされていた起訴状が読み上げられると、

協議のために将校たちは退席した。そして5分ほどで戻ってくると、早くも判決が言い渡された。当時のソ連刑法では死刑が廃止されていたので、メラーに下されたのは25年の2倍の懲役だった。一つは反ソ煽動で25年、もう一つはスパイで25年であり、単純合計で50年という過酷さだった。

判決の瞬間、メラーは何も考えられなかった。ありそうにないことだと断りつつ、微笑さえ浮かべたと彼は語っている。すぐに法廷から連れ出され、別室に移された。そこでは微笑んだことを咎められ、お前は軍事法廷にいたのであって、教会の祭りではないんだぞといわれ、最後の望みを問われた。メラーは母親に彼がどこにいるかを知らせてほしいこと、二つのボストンバッグが届いたかを確認めたいと答えた。当時頻繁に起こったように、母にとってメラーは忽然と姿が消えた形になっていたからである。このやり取りの後、メラーは判決文に署名するように命じられた。彼は拒否し、何もしていないこと、自白は強要されたことを改めて主張したが、それはどうでもよいことだと一蹴された。こうしてすべては終わり、メラーは建物から外に引き立てられた。そこには一人のアジア系の若い兵士が待ち受けており、メラーの肩を叩いて「同志、どれだけだ」と問うた。25年の2倍と応じると、兵士は、悪くない、お前は間もなく家に帰れるぞといい、食事は済んだかと再び尋ねた。そして食べ物を盛った陶器の皿を彼に与えた。

有罪とされたメラーはバウツェンにあるソ連の第4号特別収容所に入れられた。そして1950年までに特別収容所システムが撤廃された後も、1956年まで同地のシュタージ収容施設にとどまった。前者はバウツェン郊外の刑務所だった建物をソ連軍が接収したものであり、今日ではバウツェンIとして知られているが、当時は「黄色の悲慘」という略称で呼ばれて恐れられた (Hattig/Klewin/Liebold/Morre)。一方、バウツェン中心部に近い後者はバウツェンIIとして知られており、シュタージがベルリンの壁が崩壊する1989年まで東ドイツの独裁の反対派として危険視した人々を閉じ込めた施設である (Fricke/Klewin)。バウツェンで過ごした8年についてメラーはフォーラムの席では何も語っていないが、そこでの過酷な扱いについて彼は別の場で証言しており (Möller (a) 23ff.)、また他にも若干の著作が存在するので (Liebold/Pampel; Stiftung Sächsische Gedenkstätten 89ff.)、ある程度の推測をすることは不可能ではない。

1956年にメラーは恩赦で釈放された。彼を含む「政治犯」たちの釈放は、当時の西ドイツ首相アデナウアーの外交的成果の一つだったと考えられる。周知のように、1955年にアデナウアーはモスクワを訪れ、ソ連との国交を開いたが、その折の交渉でソ連に残留しているドイツ軍捕虜の帰国が取り決められた。それと同時に、ソ連の

影響下にある東ドイツで政治犯という名目で囚われている人々についても刑を軽減することが合意されたのである。

とはいえ、バウツェンの収容施設から 4 月 21 日に出獄したメラーには東ドイツに留まることは許されず、故郷を一目見ることもできなかった。彼には一通の釈放証明書のほかにパンと 10 マルクが渡されたが、証明書の有効期限は 4 月 24 日までであり、しかもそこには「この証明書の所持者には指定された経路で最短時間のうちにドイツ民主共和国を立ち去らねばならないことが指示されている」と注記されていた。そして 15 時 1 分バウツェン発の列車に乗り、ライプツィヒで 20 時 25 分発の列車に乗り換えて西ドイツのブレーメンに向かうことが指定されていたのである。ブレーメンに到着したメラーは道路に車が溢れているのに驚き、大きな行事があるのかと人に尋ねた。そして「いつもこうさ」という返事に彼は収容施設で過ごした時間の長さを思い知らされたのである。ブレーメンに向かったのは、その難民施設に母親がいたからであり、ようやく再会を果たすことができたが、すぐに彼は緊急受け入れ施設のあるエルツェンに行かねばならなかった。そこで彼は憲法擁護機関などによる 4 週間に及ぶ審査を受けなくてはならず、東ドイツのスパイや協力者ではないことが確認されてからブレーメンに戻ることができた (Möller (a) 40ff.)。こうして 30 歳に手が届く年齢に達したメラーはやっと平穏な生活を享受し、商業学校に通うことになった。卒業後に彼はデュッセルドルフに居を移し、1961 年からはノルトライン＝ヴェストファーレン州の公務員になって退職まで勤務した。現在、80 歳代の半ばになるメラーは、8 年を過ごしたバウツェン収容施設の保存と公開を担うバウツェン委員会の一員として今も健在である。

ただ証言の問題点を指摘するなら、全体を通じて、彼がなぜ逮捕され、有罪とされたのかについて示唆するだけで、明確な説明をしていないのが惜まれる。成立期にあった当時の東ドイツではソ連軍政部や社会主義統一党への反対派はもとより、無実の人々でさえ突然逮捕されることは珍しくなかったが、標的にされたのは、ナチ犯罪や反共ないし反ソ活動など何らかの客観的理由のゆえなのか、逮捕に至ったのは友人・知人による根拠の曖昧な密告のためなのか、周囲の誰が個人の動静を探るスパイや密告者として活動していたのかなどの諸点が重要であり、メラーの場合にもこれらの解明がやはり必要とされよう。ソ連の軍事法廷と東ドイツの政治司法で行われた名ばかりの裁判の杜撰さは夙に知られており、簡単に論及したことがあるが (近藤 (a) 144,151,155)、その事実がメラーによっても確証されたのは、確かに一歩前進と評価できよう。だが、そうした問題だけではなく、理由もなく突然人が消え去る事件が頻発すれば、誰もがいつかは自分が犠牲者になるのではないかという不安を覚え、萎縮

するのは当然であり、それが批判的な言辞や行動の抑制や他者への警戒につながることに照らせば、逮捕が明確な根拠もなく恣意的に行われたか否かという問題は重要な意味を持つ。そうした観点から見ると、理不尽な苦難を強いられたメラーの事件の背後には、彼が言及しないまま残した未解明の闇が広がっているように感じられるのである。

3. ケーラー夫妻の場合

次にケーラー夫妻の事件を取り上げよう。

ここで中心を占めるのは、既述の書に収められた手記である。また執筆したのは夫妻自身ではなく、息子ユルゲン・ケーラーである (Köhler 21ff.)。同氏は 1935 年の生まれであり、戦争が終わった時にはまだ 10 歳、東ドイツ建国の 1949 年には 14 歳の少年だった。戦後は西ベルリンで石油取引の仕事に従事し、同書が公刊された 1999 年には年金生活を送っていた人物である。その手記は「私の父は髪が真っ白だった」と題されているだけで何の変哲もないが、副題に「政治的殺人の再構成」とつけられているので、多少の興味を引くかもしれない。

それではユルゲンが著した手記の概略を辿ってみよう。

ユルゲンの父エルヴィン・ケーラーは 1901 年に生まれた。彼は技師としての教育を受け、1945 年 4 月末までベルリンのマリーエンフェルデ地区にあるジューメンス社の工場に勤務した。彼が軍務を免れたのは、技師という職業の故だったと考えられる。勤務先のベルリンは度重なる空爆と市街戦のために廃墟になったが、住んでいたポツダムは 4 月 14 日までは空襲による甚大な被害を受けなかった。しかし、プロイセン軍国主義のシンボルともいえるこの街も戦争末期に壊滅した。戦火を生き延びたケーラーは、ドイツ降伏後、ポツダムの气象台で機械マイスターとして働き、電気と給水を担当した。ベルリンに隣接するポツダムはソ連の占領下に置かれたが、早くも 6 月には政党の設立が許可され、ドイツ市民の政治活動が始まった (近藤 (d) 3f.)。彼は妻とともに民主的で平和的なドイツの建設に尽力するつもりだった。そのため、1945 年 11 月にキリスト教民主同盟 (CDU) に入党した。筆者であるユルゲンは、父親の入党に関して、当時、キリスト教民主同盟が「社会民主党 (SPD) と共産党 (KPD) に対する唯一のオルタナティブ」であり、また、「共産党が社会民主党を遅かれ早かれ取り込むことは明白になっていた」と記しているが、キリスト教民主同盟と並ぶブルジョア政党として自由民主党 (LDP) が存在したことや、強制合同という通念に反して 11 月にはむしろ社会民主党の党勢が強かったことを見落としており (近藤 (e))、

その限りで入党の動機の説明は不十分といわざるを得ない。また当時のポツダムの情勢を検討したウーレマンが、労働者政党を自認する社会民主党と共産党の「労働者活動家のポツダム市民層に対する強い留保」がみられ、「政治的見解と個人的感情で市民層と反目していた」と指摘していることを考慮すると（Uhlemann 46）、キリスト教民主同盟への加入には平和や民主主義の希求を超える理由があったと考えられる。

1946 年秋には州議会などの選挙が実施された。一般にこれは 1990 年の人民議会選挙以前の唯一の東ドイツ地域における自由選挙といわれている。しかし、10 月の州議会選挙に比べて 9 月の自治体選挙では占領統治を担うソ連軍政部（SMAD）の厳しい干渉があったことを忘れるわけにはいかない（近藤（d） 40）。自治体選挙ではキリスト教民主同盟はポツダムで多数派になることはできなかったが、副市長のポストを手中にするだけの得票をした。この結果、ケーラーがポツダムの副市長に就任することになった。市長になったのは、同年 4 月に社会民主党と共産党が合同した社会主義統一党に所属するヴァルター・パウルであり、共産党員だった彼は前年 7 月にソ連軍政部によって市長に任じられていたので（Uhlemann 42）、職務を継続する形になった。

滑り出しは順調だった。誰もが市政の再建に努め、住民の給養のために奔走した。住居の面では市は瓦礫だらけであり、食糧の面では備蓄がなかったからだった。ユルゲンはポツダムに限らず、各地で住民の窮状を前にして党派を超えた幅広い協力が見られたことを指摘しているが、その事実は敗戦後のブランデンブルク州を検討したライナートによって政党間の協力的政治ないし協調的協働という表現で確認されている（Reinert 8f,12）。この文脈を辿ると、政治面で深刻な問題が持ち上がり、協力関係に亀裂が生じたのは、「1947 年 10 月の国民戦線の結成に伴って」だったとユルゲンは記している。けれども、国民戦線が形成されるのは東ドイツ建国と同じ 1949 年 10 月だから（ウェーバー 58）、恐らく 1947 年 11 月の社会主義統一党によるドイツ人民会議設立の提起と混同したものと思われる（近藤（d） 16; Suckut 57f.）。拙稿で論じたように、人民会議は政党だけでなく、自由ドイツ労働総同盟（FDGB）や自由ドイツ青年団（FDJ）などの大衆団体の代表が参加して実質的に国民議会へのステップと見られただけでなく、社会主義統一党に系列化された勢力が大勢を占めると予想されたので、キリスト教民主同盟などはこれに反対した。同党党首のカイザーたちがソ連軍政部によって解任されたのも、この反対行動が原因だった。そうした事情から、ポツダム市議会のキリスト教民主同盟の会派も人民会議に反対したので、政党間の対立が深まった。ソ連占領下の東ドイツではナチ犯罪者だけではなく、反ソ的と見做された様々な立場の人々やソ連に従順でない共産主義者すら容赦なく拘束されていた

から、ソ連軍政部を後ろ楯とする社会主義統一党の主張に公然と反旗を翻すことは極めて危険だった。そのため、人民会議反対の発言は慎重さを必要とし、キリスト教民主同盟の党员の間でも盗聴を警戒して相互の連絡に電話を使えず、手紙でも漠然とした表現にとどめざるをえなかったという。当時 12 歳だったユルゲンに重要な情報を伝達して回る役目が与えられたのは、このような背景からだった。

ここで手記は 1 年以上とび、1949 年前半に移っている。人民会議は反対を押し切って設置された。この人民会議については、そこに集う代表を選出するため、1949 年 5 月に初めて統一リスト方式による選挙が行われた。しかし、議席配分が予め確定されたリストに対する賛否だけを問うこの方式は、得票に議席が連動する自由選挙の実質的な否定に等しいところから、統一リストに対してもキリスト教民主同盟の側から強い反対があった。ポツダムでもキリスト教民主同盟の会派の大抵のメンバーはそれに反対していて、政党間の対立が改めて激化した。この局面で重要な役割を演じるようになったのが、ポツダムに移ってきたヘルマン・ゲリクという人物だった。ゲリクの経歴は詳らかではなく、キリスト教民主同盟の党员ではあったが、実際は「ロシアの占領権力のスパイ」だったとユルゲンは言う。しかしその事実をいつ、どのようにして察知したかにユルゲンは触れていない。ポツダムの社会主義統一党はキリスト教民主同盟に対処するのに手を焼いていたが、ゲリクの登場で望んでいた情報を入手できるようになった。軍政部を通じて彼のスパイ報告に定期的に接することができたからである。キリスト教民主同盟に潜り込んだゲリクは党员の弱点を把握し、脅迫する術を心得ていた。しかし成果を上げるためには党内に強固な足場を築く必要があった。キリスト教民主同盟ポツダム地区委員長の座を狙ったのはその目的からだった。地区委員長は党员の選挙で選ばれたが、立候補したルートヴィヒ・パウエスはゲリクを大きく引き離す票を獲得した。ところが、そこにソ連軍政部が介入し、その指示でゲリクが委員長に就任することになった。このように露骨な介入は、党员に対して威圧を加えることにより、ソ連軍政部ないし社会主義統一党に対して協力的な姿勢をとらせる意図があったのはいうまでもない。キリスト教民主同盟では初代党首のヘルメスや 2 代目の党首カイザーが政党としての自立性を固守したためにソ連軍政部によって解任されたことが知られているが (近藤 (c) 13,18)、地区レベルでも類似したことが行われたのである。

このような成り行きは、無論、ケーラーやその周囲の党员たちにとって耐えがたいものだった。それにもかかわらず、ゲリクはケーラーのポストすら狙い始めた。1950 年 1 月にポツダム市の建設責任者ハインリヒ・リヒャルトがサボタージュの容疑で逮捕された。それはケーラーがリヒャルトを庇うことを見越しての意図的な策略だっ

た。実際、ケーラーは彼を弁護し、ケーラーが経済犯であるリヒャルトを擁護したという理由で、動員された群衆が市議会の会議を妨害する挙に出たのである。その結果、ケーラーは副市長の職を辞さざるを得なくなった。こうしてゲリクは目的を達して副市長の座に就いたが、キリスト教民主同盟を弱体化する行動はそれで終わらなかった。ゲリクの関与は定かではないものの、1950 年 3 月 28 日にケーラーが娘であるユルゲンの姉とともに略称 NKWD と呼ばれていたソ連内務人民委員部とシュタージの前身である K5 局によって公道で逮捕されたのである。女性がケーラーの妻シャルロッテではないことが分かったと、警察官がケーラーの自宅に向かい、ユルゲンの母を逮捕した。警察が去ると、入れ替わりに娘が釈放されたが、すぐに彼女は西ベルリンに赴き、両親の友人たちに逮捕を知らせた。ユルゲンの祖母と妹は自宅でシャルロッテの逮捕を見守ったが、彼と弟は学校にいて現場には居合わせなかった。ただ彼は同級生とともに学校に引きとめられたのに、弟には何事も起こらず、通常どおりに帰宅した。ユルゲンが学校から解放されると、家には誰もおらず、見張りの警官が立ち入りを制止した。祖母は弟たちを連れて西ベルリンの友人のところに身を寄せたのである。ユルゲンが警官に何が起こったかを尋ねると、警官はそれに答えるのは禁じられていると応じ、それではどこへ行ったらよいのかと聞くと、それは知らないという返事だった。このため、ユルゲンも西ベルリンに行けば家族に会えるだろうと考えて、ポツダムを離れた。そして西ベルリンで家族を襲った出来事を知ることになったのである。

友人たちは両親がどこにいるのかを突き止めようとしたが、成果はなかった。後になって、同じ日に市の幹部フランツ・シュロイゼナーとルートヴィヒ・バウエスが逮捕されていたことが分かった。シュロイゼナーはポツダム警察の留置場に入れられ、そこで死亡したが、それは自殺によるものとされた。ユルゲンは彼が快活な性格だったことを知っていたので、自殺とは信じなかった。バウエスにも拷問が加えられて死に至ったことから、シュロイゼナーも拷問による死だったとユルゲンは推測している。

一方、開示された警察の文書から、ゲリクは自分に従わない者に対して、ケーラー夫婦のように牢獄送りになると脅していたことが明らかになった。また同じ文書から、1952 年にゲリクが西ベルリンで開かれたカトリックの大会に姿を現し、そこでキリスト教民主同盟の活動家に見つかり、警察に拘束されたことも判明した。告発の理由とされたのは死者を出す結果になった人身の拉致だったが、関係者の証言にもかかわらず、証拠不十分として検察官は起訴手続きを打ち切った。そのほかに文書では、略奪から守るためと称してゲリクがケーラー家から家財をキリスト教民主同盟の事

務所に運ばせたことも記録されている。家財の価値を査定するために市は担当者を派遣したが、その際、ゲリクはケーラー家が反動分子であり、その財産は人民の所有になると主張したという。

ケーラー夫妻の逮捕をきっかけにして家族は離散した。両親を失ったユルゲンの妹は洗礼に立ち会ったハンブルクにいる代母に引き取られた。姉と弟は当面は両親の友人のもとにいる祖母と暮らすことになった。そしてユルゲンは父親の従姉のところ身を寄せることになったのである。

1957年にハンブルクで開催されたキリスト教民主同盟の大会で、ソ連の収容所に囚われている党员のリストが読み上げられた。ケーラー夫妻の名前もそこにあった。そのためユルゲンは詳細について西ベルリンの亡命キリスト教民主同盟に照会してみたが、詳しいことは何もわからなかった。

その後、ユルゲンはカイザーとともにキリスト教民主同盟副党首を解任されたエルンスト・レンマーのもとを訪れた。ソ連占領地区ではキリスト教民主同盟の設立アピールに名を連ねた人々の大半が西側に逃亡したが、彼もその一人だった。1949年に西ベルリンに逃れたレンマーは1957年から西ドイツ政府の全ドイツ問題省を率いる大臣になっていたが、両親のところに来たことがあったので、両親の消息について話すために面会した。ユルゲンに対してレンマーは、カイザーの後にキリスト教民主同盟の党首になったオットー・ヌシュケに会うように勧めた。1949年の東ドイツ建国以降名目的に副首相の座にあったヌシュケは一般にキリスト教民主同盟をソ連に追随させた政治家として否定的に評価されることが多い。けれども、「党を存続させようとすれば強いられる適応以外に方途はなかった」(Reinert 15) ことを考慮するのなら、むしろソ連の圧力下で難しい舵取りを託されて悪戦苦闘した政治家というべきであろう(近藤(c) 22f.)。レンマーと同じくヌシュケも両親の家を訪れたことがあり、ユルゲンは彼を知っていたが、会っても成果は得られなかった。しかし、東ドイツの司法省などにも問い合わせた末、最後にヌシュケを補佐していた人物から協力を得ることができた。その働きで、ソ連の赤十字に当たる「赤い半月」から1959年に通知が届き、ケーラー夫妻は1951年にソ連で死亡したと告げられたのである。

1958年にユルゲンはボンにあった権利保護局に呼ばれた。権利保護局はドイツの敗北に伴い、ドイツ赤十字、カリタスなどが主に戦争捕虜となったドイツ兵の行方と安否を調べるために設けた組織を政府が継承したものであり、連邦司法省の外局だった。そこではユルゲンは両親に関してどんな情報を入手しているかを尋ねられた。何もないと答えて、分かっていることが何かあるかと逆に尋ねると、とくにないという返事だった。しかし、ドイツ統一後に判明したことからすると、これは真実ではなかつ

た。その時にもし正直な返答を得ていたならば、ゲリクとポツダム市長だったパウルを刑務所に送り込むことができたかもしれないとユルゲンは述べている。両親の死に対してだけでなく、シュロイゼナー、パウエスの死についても責任を追及できたはずだからである。

1989 年 11 月に東西を隔てていたベルリンの壁が崩れた。翌 1990 年 3 月にユルゲンは妻とともにベルリンの壁が開いてから初めてポツダムを訪れた。キリスト教民主同盟の事務所では親戚の女性の協力で、手書きの古い黨員簿を見ることができた。それを見せると彼は驚いた。国民戦線への同党の編入に抗議した黨員の氏名が抹消されていたからである。前述のように、ユルゲンは国民戦線と人民会議を混同しているの、ここでも抹消された黨員が反対したのは人民会議だった可能性が大きい。いずれにしても、これらの黨員は個人的に面識のあった人々ばかりであり、子供ながらに連絡係を務めたこともあったので、彼らがポツダムのどの地区にかつて住んでいたかも彼は知っていた。

さらに調べを進めると、驚きが重なった。ケーラー夫妻の名前は住民登録にも土地登記簿にも見出せなかったからである。しかも、市は 1959 年に夫妻の死亡公告を出していたにもかかわらず、ポツダム市の公式記録のどこにも見当たらなかった。しかし、一つだけ例外があった。戸籍係が戦時下だった 1943 年の出生記録から抹消するのを忘れたらしく、同年に出生したユルゲンの妹が父の名前で届けられたという記録が残っていたのである。戸籍係の職員は、ユルゲンから両親に関する話を聞かされて仰天した。ポツダム市の貯蓄金庫では両親のデータを明かして口座を探したが、戦争で書類は焼失したということだった。ところが、後日、モスクワから届いた両親の資料のなかには多くの書類とともに父親の小切手帳があり、やはりポツダムの貯蓄金庫のものだった。ただドイツ第二テレビ（ZDF）がこの件を報じた後、貯蓄金庫は調査への協力を拒むようになったという。

こうした事実を手掛かりにして、ポツダムの裁判所にユルゲンは両親の名誉回復を申し立てた。けれどもそれは認められなかった。後述するように、ケーラー夫妻にはソ連の軍事法廷で死刑判決が下されていたが、当時のドイツはこの裁判に責任がないというのが、却下された理由だった。ユルゲンはこれに抗議して、当時の東ドイツは両親の処刑という犯罪と無関係ではないと唱えたものの、無益だった。このようにドイツの裁判所が名誉回復に冷淡であることにユルゲンは納得できなかった。というのも、共産主義ソ連が消滅した後のロシアの軍検察庁がテロ裁判の判決を訂正する用意があることが知られていたからである。『シュピーゲル』誌を通じてユルゲンはロシア軍検察庁の住所を知り、コンタクトをとったところ、所定の書式をもたず、ロシア

語もできないにもかかわらず、4 週間のうちに両親を名誉回復する通知が送られてきた。これによって彼の努力はひとまず実を結んだのである。

その後、両親を名誉回復したモスクワの軍検察庁から一通の手紙が届いた。それにはポツダムにおける両親の裁判記録が添えられていた。それによってユルゲンは両親がたどった運命を再構成してみることができた。その文書はまるで推理小説のようだと彼は感じたという。

その文書によると、エルヴィン・ケーラーとシャルロッテ・ケーラーを裁くソ連軍事法廷は 1950 年 12 月の 1、2、3 日の 3 日間開かれた。罪状は反ソ煽動とスパイだった。スパイについては立証されないとして取り消されたが、ともに起訴されていたポツダムの書店主が、1949 年の選挙をボイコットすることをエルヴィンが主張していたと証言した。この選挙が何を指すかは明確に述べられていないものの、恐らく前述した統一リスト方式の人民会議選挙のことだと推察される。これがなぜ反ソ煽動に該当するかの理由も触れられておらず、またそれ以外の行為も取り上げられていた可能性が残るが、いずれにしてもわずか 3 日間の審理でケーラー夫妻に死刑判決が下された。エルヴィンは裁判から 2 ヶ月後の 1951 年 2 月 3 日にモスクワのブティルカ監獄に移送され、そこで同月 21 日に銃殺に処された。一方、シャルロッテはエルヴィンが処刑される前日の 2 月 20 日に同じ監獄に移され、4 月 10 日に銃殺された。彼らのモスクワへの移送については、ブランデンブルク州刑務所の責任者だったルスギン大佐の署名した文書があり、判決の執行についてはヴォルベフ中尉が決定した。資料から判断する限り、両親には一緒に語り合う機会は与えられていなかったとユルゲンは付言している。なお、拙著でも触れたとおり、有罪判決を受けたドイツ市民がソ連に移送されて処刑されたケースがかなり多くあったことが、J. ルドルフなどの調査によって確かめられていることを付け加えておこう (近藤 (a) 141f.)。

因みに、送られてきた文書によれば、エルヴィンが選挙ボイコットを唱えたと証言した書店主は、そのほかにも犯罪のための秘密会議に無理やり参加させられたと申し立てた。また、その会議でルートヴィヒ・パウエスをキリスト教民主同盟ポツダム地区委員長に選出することが決定されたということも証言した。上述のようにパウエスが逮捕されたのはこれが引き金となっており、市中心部にあるリンデンシュトラーセの収容施設で拷問の結果、死亡した。一緒に逮捕された彼の妻がユルゲンに語ったところによれば、両親もまた睡眠剥奪とバケツの水かけで拷問され、ひどい健康状態に陥っていたという。そのため、エルヴィンは髪が真っ白になってしまった。これが手記にユルゲンが付けたタイトルの由来である。ともに起訴されていた書店主は死刑を免れ、1956 年に悪名高いバウツェンのシュタージ収容施設を出所した。その後、彼

はボンの権利保護局に出頭して報告を提出したが、そこに記されている内容はモスクワから届いた文書と合致しないとユルゲンは指摘している。その男は西ドイツで存命だという。

ケーラー夫妻をはじめポツダムのキリスト教民主同盟の党員を死に追いやったゲリク这个消息についてもユルゲンは手短かに記している。それによると、同党の弱体化で成果を上げた彼の経歴は 1960 年 2 月に唐突に終わった。西ベルリンのテンペルホーフ空港で拘束されたのである。なぜゲリクがそこにいたのかの説明はないが、拘束されたのはポツダムで発行された身分証明書のほかに西ベルリン発行という偽造した身分証明書を所持しているのが発覚したためだった。ポツダムで主要な政治的人物の一人になっていたことを考えれば、見破られないように警戒していたはずだし、そもそもなぜ偽造証明書をもっていたのかも疑問として残る。そうした事情を考慮するなら、この発覚自体も全くの偶然なのか、それとも仕組まれていたのかも明らかではない。ともあれ、彼の身柄は警察署に移された。しかし取調べが始まる前に、彼は隠し持っていた即効性の毒物を飲んで監房で命を絶った。こうして、なぜ死を選ばなくてはならなかったかという謎を残したまま、ケーラー夫妻をはじめポツダムのキリスト教民主同盟に打撃を与え、独裁体制への屈服を強いたゲリクは世を去ったのである。

4. 政治犯問題の若干の考察

ここまでハラルト・メラーの証言とユルゲン・ケーラーの手記に即して、東ドイツ成立期に起こった二つの事件のあらましを見てきた。後者の文章が収められた同じ書には、その他にいずれもポツダムで逮捕され、ケーラー夫妻と同じリンデンシュトラッセの収容施設に囚われたホルスト・シューラーやルッツ・ボルクマンの体験記も含まれている (Schüler; Borkmann)。

前者は父親をナチのザクセンハウゼン強制収容所で失い、自身は 4 年間兵士として戦争に参加した後、敗戦後はポツダムで新聞社に勤務した人物である。彼はスパイとして働けというソ連軍政部からの要請を拒否したのに加え、占領行政を風刺する記事を書いた。そのために 1951 年に 20 年の刑期の懲役に処され、悪名高いソ連の極北の地ヴォルクトに送られた。政治犯に関して調べると、しばしばヴォルクトが登場する。例えば R. ブーデの回想記はタイトル自体をヴォルクトとしており、A. デッカーや H.-D. シャルフのそれにもヴォルクトの名が入っている (Bude; Decker; Scharf)。一方、ソ連に抑留されたドイツ人戦争捕虜の命運を辿った場合にもヴォルクトという地名に度々出会う (Knopp 35f; カレル 634f)。わが国ではシベリア抑留に絡み、タイシェ

トやコリマなどの地が高杉一郎の手記『極光のかげに』などを通じて知られている(高杉: 辺見)。ドイツでこれらに匹敵するのが、捕虜や政治犯が過酷な労働を強いられ、多数の犠牲者を出したために囚人たちから「白い地獄」と呼ばれたヴォルクタである。最近では E. アールベルクがかつての政治犯の会合での報告で、コリマ、マガダンなどと並べてヴォルクタを「グラウグの同義語」だったとし、同地での悲惨な出来事について語っているが (Ahrberg 40ff.)、シューラーはそこでの過酷な重労働を辛うじて生き延びたのである。

一方、後者は福音主義教会の青年活動に従事し、仲間とともに 1953 年に逮捕された人物である。敗戦後のドイツには今日のディスコやクラブのような娯楽施設はなく、自由ドイツ青年団の催しも退屈で魅力がなかったので、教会青年部の活動は若者に人気を博していた。しかし、教会を敵視するソ連の占領当局にはこのグループは保守的なブルジョア層に重心があるとみられたので、官憲から「国家と党のイデオロギー的優位に対する対抗力」と見做され、警察や自由ドイツ青年団による妨害を受けた。そしてこの妨害はスターリンが死んだ 1953 年になるとエスカレートして弾圧に変わり、主要なメンバーは反国家的宣伝と煽動の罪で懲役刑に処されたという。

こうした生々しい体験記を含め、上掲の書のどの文章も興味深い内容といえる。しかし、何箇所かで指摘したように、証言や手記には説明不足や飛躍に加え、記憶違いも散見されるので、決して完全なものではないことを忘れてはならない。そのことを考慮に入れたうえで、本稿で悲劇と呼べるメラーやケーラー夫妻の事件を取り上げようと考えたのは、前述の拙著でもやはり政治犯を扱ったことがあるからである。そこでは様々なケースに照明を当てたが、なかでも焦点を合わせたのは、1952 年 4 月末にオーバーゲブラというテューリングゲンの村で起こった事件に関連してムラスとヴィルヘルムという二人の人物が逮捕され、9 月に処刑された出来事である (近藤 (a) 118ff.)。事件というのは、独裁政党の座を固めた社会主義統一党の党員で心臓病を抱えた人物がメーデー前夜の居酒屋での騒ぎの渦中に死亡した一件である。駆け付けた医師の診断では病死だったが、すぐに発足間もないシュタージが介入して政治的動機による殺人とされ、やはり同党の党員だった村長と日頃から関係の悪いキリスト教民主同盟所属のムラスたちが逮捕されたのである。今日から振り返れば、死亡は病死であり、二人は無実だったと推定される。けれども、近隣の人々を集めて開かれた見せしめ裁判では、社会主義の建設を妨害する帝国主義の策謀が背後にあると断定された。そして弁護人が出る幕もないままほとんど即決で死刑判決が下され、事件からわずか 4 ヶ月後に刑が執行されたのである。

政治への司法の従属を物語るかのように判決理由で緊迫した国際情勢が説明され

ていることに照らせば、司法の名による2人の人物に対する政治的殺人は、それ自体で注目に値するといつてよい。また、拙著で触れたツァーンの事件や本稿におけるメラのそれと並べてみると、瑣末なことでも針小棒大に解釈し、脅威を大寫しにする傾向が浮かび上がる。これについては、東西の国際的緊張を背景にして東ドイツでは「不安と仮想敵への偏執病的な恐れによって、それに備える監視抑圧機構が生じ」たのであり、「階級敵は至る所で活動している、学校でも、事業所でも、路上でも」という「パラノイア・メンタリティ」が指導部を特徴づけていたというフルブルックの指摘が傾聴に値しよう（フルブルック 131）。ただパラノイアに近い状態がすでに戦争終結直後に現出していたことも併せて指摘しておくべきであろう。当時は戦勝国の大連合がまだ存続していて冷戦的な構造はなかったものの、ナチの残党とヒムラーが1944年秋に創設を命じた「人狼」と称するパルチザン組織によるテロと破壊活動への恐怖が占領当局を覆っていたのである。

不完全ながらも今日までに判明しているテューリンゲン州のケースでは、「人狼」に関与した容疑で1945年から46年にかけて表1に示した人数の青少年がパラノイアの恐怖感の犠牲になった。その詳細については自身も苦渋を嘗めたB. プリースが追跡しているが（Priess 60ff.）、ほとんどが20歳未満の死亡した77人以上の若者のうち、26人は判決直後に銃殺に処され、残りは収容施設で飢餓か病気のために死亡した。またこれと同時期にケーラー夫妻の地元ポツダムでは20歳以下の56人の青少年が処罰され、そのうち15人が銃殺、3人が死刑判決だったのを10年から20年の懲役に減刑されたほか、バウツェンとザクセンハウゼンの収容所で4人が死亡したことが確認されている（Priess 151f.）。一方、ルターやバッハに縁の深いテューリンゲン州の

表1 1945/46年のテューリンゲン州における青少年の逮捕者数

都市	逮捕人数	死亡者
アイゼナハ	33	13
クロイツブルク	11	不明
テュットレーベン	17	7
シュヴァープハウゼン	19	7
ゼーベルゲン	6	2
グライツ	15	7
ゲラ	18	8
アボルダ	19	9
グロイセン	38	24

（出典）Der Landesbeauftragte des Freistaates Thüringen für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR, Todesurteile gegen Kinder: Erinnerung an 33 Eisenacher Jugendliche, die 1945 verhaftet wurden, Erfurt 1998, S.12.

表2 1945年秋から1946年初頭に有罪になったアイゼナハの青少年

名前	職業	生年	年齢	生死
クラウス・アーベ	訓練生	1930	15	
ヴィルフリート・アールブルク	訓練生	1930	15	収容所で死亡
ゲアハルト・アンドレス	訓練生	1928	17	
ヘルムート・ブラウン	訓練生	1929	16	
ホルスト・フラッター	訓練生	1930	15	銃殺
ゲアハルト・フリードリヒ	上級学校生	1929	16	
ゲアハルト・グロック	パン職人	1928	17	
カール・ハルトウルク	訓練生	1928	17	収容所で死亡
ハインツ・ホイジング	労働者	1922	23	銃殺
ゲルト・ホツラー		1925	20	収容所で死亡
ヘルムート・イスライプ	上級学校生	1926	19	銃殺
ヘルムート・ケルナー	上級学校生	1928	17	銃殺
ホルスト・キルヒナー	訓練生	1925	20	
ロルフ・クナーベ	上級学校生	1925	20	収容所で死亡
ブルーノ・クネッヘル		1925	20	
ゲアハルト・ラウネルト	左官	1927	18	銃殺
ハインツ・リーベトラウ	訓練生	1926	19	
クラウス・ミュラー	生徒	1928	17	
ルディ・ミュラー	生徒	1928	17	収容所で死亡
ヘルマン・ノルバイ		1928	17	
フレッド・エトリング	ギムナジウム生徒	1930	15	銃殺
クラウス・ラインハルト	商業学校生徒	1928	17	
ゲオルク・リヒター	訓練生	1930	15	
クルト・ロンメル	塗装工	1930	15	
ヘルムート・ロータウグ		1928	17	
ロルフ・ルスト	商業学校生徒	1929	16	
ギュンター・ザルム	商業学校生徒	1928	17	
ハインツ・ザウアーブライ	塗装工	1928	18	
ギュンター・ジン	訓練生	1928	17	銃殺
フランツ・シュトゥーベ	化学専門労働者	1926	19	銃殺
ホルスト・ヴィーナー	上級学校生	1928	18	
マンフレート・ツィーム	上級学校生	1928	18	
ヘルムート・ツェラー	訓練生	1930	15	

(出典) Der Landesbeauftragte des Freistaates Thüringen für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR, Todesurteile gegen Kinder: Erinnerung an 33 Eisenacher Jugendliche, die 1945 verhaftet wurden, Erfurt 1998, S.6.

表3 1946年に有罪となったヴィッテンベルゲの青少年

名前	生年	刑罰
クラウス・アドルング	1930	懲役10年
ヴァルター・アンドレゼン	1930	懲役10年、1947年ザクセンハウゼン特別収容所で死亡
アルフレート・ブラバント	1927	死刑、1946年監獄で死亡
ギゼラ・ドアマン	1930	懲役10年、ザクセンハウゼン特別収容所廃止に伴い1950年釈放
ブルーノ・フリュッゲ	1931	懲役10年、1951年釈放
イルムガルト・フリュッゲ	1909	死刑、1946年に懲役10年に減刑
ホルスト・ヘニング	1929	懲役10年、1948年ザクセンハウゼン特別収容所で死亡
ホルスト・ヒンツェ	1926	懲役7年、1947年ザクセンハウゼン特別収容所で死亡
ギュンター・ホルツ	1926	懲役10年、1948年ザクセンハウゼン特別収容所で死亡
アンネリーゼ・イルゲロート	1926	懲役10年、1961年釈放
アルトゥア・ユングリング	1928	死刑、1946年執行
ホルスト・クレペル	1931	懲役10年、1951年釈放
カリン・ルート・クリンガー	1926	死刑、1946年に懲役10年に減刑、1956年釈放
ウルズラ・クリンガー	1928	懲役10年、1951年釈放
ヘルベルト・クリッシュ	1929	懲役10年、1951年釈放
ベルタ・ミルケ	1908	死刑、1946年懲役10年に減刑、1951年釈放
ギュンター・ミルケ	1930	死刑、1946年懲役10年に減刑、1954年釈放
ホルスト・ノイエンドルフ	1929	死刑、1946年懲役10年に減刑、1951年釈放
ホルスト・ペータース	1930	懲役10年、1947年ザクセンハウゼン特別収容で死亡
エーリヒ・ラートケ	1928	懲役10年、1951年釈放
ハンス・ショーフ	1920	死刑、1946年執行
ギュンター・シュルツ	1924	死刑、1946年執行
ヘルガ・シュトゥッペンハーゲン	1930	懲役10年、1950年ザクセンハウゼン特別収容廃止に伴い釈放
エゴン・タイヒマン	1928	懲役10年、1948年ザクセンハウゼン特別収容で死亡
ペルンハルト・ティッテル	1930	懲役10年、1947年ザクセンハウゼン特別収容で死亡
ボド・ヴェークナー	1930	懲役10年、1951年釈放
ハンス・ヴェークナー	1929	懲役10年、1951年釈放
フリッツ・ヴェルナー	1925	懲役10年、1948年ザクセンハウゼン特別収容で死亡
ハンスユルゲン・ヴェルナー	1931	懲役10年、1951年釈放

(出典) Rübiger, Rocco, „Allenfalls kommt man für ein halbes Jahr in ein Umschulungslager...”. Nachkriegsunrecht an Wittenberger Jugendlichen, Torgau 1998, S. 72ff. より作成。

古都アイゼナハでは、表2のように同じ時に33人の犠牲者が出たことが明らかになっている。これについては報告書があり、それによれば、「人狼」のメンバーであることや反ソ活動が容疑とされた点と並んで（Der Landesbeauftragte des Freistaates Thüringen 5）、逮捕当時に15歳だった少年が何人も含まれていたことが判明している。またレビガーが掘り起こしたブランデンブルク州のヴィッテンベルゲの場合には、ありもしない地下組織に関与した容疑で1945年暮れから翌年の初めにかけて29人の無実の青少年が逮捕され、2月5日から9日まで僅か5日の軍事法廷で9人に銃殺、19人に10年の懲役、1人に7年の懲役という刑が言い渡された。これをまとめたの

が表3である。アイゼナハにせよヴィッテンベルゲにせよ、銃殺以外に収容所で死亡した人数が多いのが目立つが、そこには特別収容所での食糧不足や不衛生など青少年が置かれた生活環境の劣悪さが反映されているのは指摘するまでもないであろう。これに加え、A. プライスジンガーが13歳にすぎない少年すら逮捕されたことを伝えているのも注目される。それによれば、戦争末期の激戦地ゼーロウ近くの村で1945年6月1日の夜中に13歳の少年が自宅で捕えられたが、彼が連行されたソ連軍施設にはすでに6人の同級生がいた。かれらは「人狼」の容疑で個別に取調べられ、睡眠剥奪に加えて激しい暴行を受けたが、その後に全員がケッチェンドルフの以前の強制収容所に押し込められたという (Preissinger 22ff.)。もっとも、当時頻発した密告によると思われる上記の逮捕者の人数については最終的に確定した数字ではなく、これからも調査が進めば増加する可能性がある点に留意しなければならない。また、とくに注目されるのは、「ハリウッドのモンスター映画製作者の病的な想像力を除けば人狼などは存在しなかった」 (Preissinger 23) にもかかわらず、若者たちの多くが「人狼」メンバーとされたことに見られるように、逮捕の具体的な根拠が曖昧だったこと、しかも彼らが取調べで受けた拷問に等しい扱いや判決が即座に言い渡される即決裁判など、上述したメラーのケースと基本的に同一だったといえることである。これらの点からは、連合国がドイツ占領の共同目標とした非ナチ化や民主化という大義が、ソ連占領地区では住民を威圧し、反ソ活動を封じ込める口実として使われたことが窺えよう (近藤 (c) 91f.)。被害者の一人は、逮捕と裁判は「明らかに占領権力にとって必要とされる住民の服従を徹底化するための見せしめという意義を有していた」と述べているが (Räbiger 28)、核心を衝いた指摘といってよい。

他方、上述したムラスたちの出来事をケーラー夫妻に対する政治的殺人と照合してみると、3つの特徴点が鮮明に浮かんでくる。第1は、抹殺されたのがキリスト教民主同盟の党员だったことである。第2は、ケーラー夫妻の逮捕が1950年に起こったことであり、ゾビクたちの事件と時間的に近いことである。第3は、形式上は裁判を踏まえた処刑であるにしても、法治主義の原則からかけ離れていることである。これらの諸点について少し考察を加えてみよう。

まず第1点から考えよう。

東ドイツの衛星政党としてのキリスト教民主同盟は長く存在感が皆無に等しかったので、東ドイツは最初から社会主義統一党の実質的な一党独裁だったかのように錯覚しやすい。しかし、実は戦後初期にはキリスト教民主同盟は一定の自立性を有していたのであり、それゆえに後者から敵視されていた。戦後のソ連占領地区では社会革命とも評しうる大規模な土地改革が実施されたが、大土地所有の無償没収ではなく有

償を唱えたキリスト教民主同盟初代党首のヘルメスたちがソ連軍政部によって解任され、続いて人民会議に反対した第 2 代党首カイザーたちが解任されたのは、同党が自立性を保持していたからにほかならなかった。その後のキリスト教民主同盟はヌシュケの指導下でソ連軍政部とこれに一体化していた社会主義統一党に対して譲歩を重ね、屈服を深めていくが、それでも 1952 年に社会主義統一党の指導権を最終的に承認するまで強い圧力が加えられたのである（近藤 (d)）。もっとも、政治的圧力はキリスト教民主同盟に対してだけ向けられていたのではなかった点も見落とせない。社会主義統一党は 1946 年 4 月に社会民主党と共産党が合同する形で成立したが、その過程でソ連軍政部を後ろ楯とする共産党から社会民主党に対して一部は暴力的な圧迫が行われ、社会民主党員の間で犠牲者が続出した。合同が一般に強制合同と呼ばれているのは、そうした事情を物語っている。それにとどまらない。人事での対等原則などの合意を踏まえて合同したにもかかわらず、社会主義統一党の内部では社会民主党系の党員に圧力がかけられたし、とりわけ「新しい型の党」と呼ばれた同党のスターリン主義化の過程では新たに犠牲が生じたのも忘れられない。こうして東ドイツ成立期にはソ連の後押しで主導権を掌握しようとする社会主義統一党の強引な行動のために内外で多数の人々が犠牲となったのである（近藤 (f)）。そうした事情を考えれば、ムラスやヴィルヘルムと同様にケーラー夫妻が悲運に見舞われたのは、キリスト教民主同盟がいまだ衛星政党ではなく、ソ連と社会主義統一党に屈服していなかったことの証明と見做せよう。

第 2 点の時期の問題に関しては、ケーラー夫妻などが処刑された時期は 1949 年 10 月の東ドイツ建国から日が浅く、独裁と社会主義に向けての体制固めが強力に推進されていたことが重要になる。ナチス・ドイツを共通の敵にして戦時期に形成された米英とソ連の大連合はドイツ降伏後も直ちには崩れず、ドイツ占領についてもフランスを加えた連合国管理理事会が設置されて、各国の占領地区を超えるドイツ全体にかかわる問題に関して協議する場となっていた。しかし、マーシャル・プランや米英占領地区の合体などを伏線にして、1948 年になるとそこからソ連は脱退した。また、同年半ばには西側占領地区での通貨改革やそれを契機とするベルリン封鎖が始まった。これらの出来事に見られるように、この年にかつての大連合は完全に崩壊し、力の対決という様相が深まった。同時に、これと並行して共産圏の内部でも亀裂が顕在化し、ユーゴスラヴィアがコミンフォルムから除名されて、いわゆるチトー主義に対する攻撃が強まった。ソ連が東欧諸国で共産党による支配の確立を目指すようになったのはこうした情勢の推移の中であり、その一端が例えば同年のチェコスロヴァキアにおける政変として現出したのであった（木戸 36）。こうして冷戦が激化して国際的に緊張

が著しく高まったのを背景にして、ソ連が占領する東部ドイツでは、非ナチ化の終結が宣言される一方で、政治的立場に関わらず反ソ分子と目される人々が対敵協力、サボタージュ、破壊工作などの名目で摘発され、社会主義統一党でもかつての社会民主党員を中心に粛清が大規模に押し進められていくことになったのである (近藤 (f))。社会主義的多党制という美名で飾られた社会主義統一党の一党独裁体制が構築され、キリスト教民主同盟から自立性が奪われたのはこうした文脈での出来事であり、冷戦の激化と独裁体制の建設を下地にして政治的殺人が起こったのである。

第3の裁判については、東欧各国で権力の側からの恣意的な逮捕とみせしめ裁判が頻発したことを想起すべきであろう。ムラスたちは不十分な証拠にもかかわらず逮捕されただけでなく、裁判自体も成立したばかりの東ドイツの裁判所で社会主義に忠実な速成の裁判官によって行われ、その場には近隣住民が動員されて立ち会わされた。これに対し、ケーラー夫妻の場合はメラーも含めて証拠がないのは同じでも、ソ連の軍事法廷で裁かれ、その場に住民の姿がなかったのが違っていた。拙著で取り上げた抵抗運動の若者たちもソ連軍事法廷に立たされたが、これらの例は、東ドイツ成立後も政治的裁判をソ連が行い、独立国家の外観に反して東ドイツがソ連に従属したままだったことを示している。東ドイツ建国期の政治的裁判としては、ソ連の特別収容所に司法的な手続きなしで囚われていた政治犯を一括して東ドイツの裁判所が処理したヴァルトハイム裁判が有名だが (近藤 (c) 110)、実際には建国後もソ連軍事法廷が存続し、「ドイツ民主共和国・ソ連間の諸関係に関する協定」が締結されて東ドイツの完全な主権が宣言された1955年まで活動していた (Erler 15ff.)。そこで有罪判決を受けたドイツ民間人の総数は3万人に上ると推定されており (Müller (a) 15)、死刑判決は東ドイツ国内ではなく、ソ連に移送した上で執行されたのであった。確かに軍事法廷という性格上、ソ連による裁判は一般住民の目に触れず、見せしめ裁判とはならなかった。けれども、法廷が住民を威圧する道具として使われなかったにせよ、即決ともいえる短時間で極刑の判決が下され、短時日のうちに執行された点で東ドイツの裁判と共通していた。実際、被告に反論や弁明の機会を保障し、弁護人を立てて公正に審理すること、一審だけで決着せず、慎重を期すことなどを法治主義の原則だと考えるなら、最初から筋書きができていたことが确实視される東ドイツ成立期の一連の裁判は、司法の名に値するとは到底言えないであろう。政治犯とされたある人物は回想記で、「軍事法廷の基礎は事実ではなく嫌疑であり、証拠ではなく主張だった」と記し (Räbiger 32)、P. エアラーも、「ソ連軍事法廷のすべての判決は、捜査の仕方、裁判の進め方の点で国際的に認められた法治国家の規範を無視しているから法的に無効である」と述べているが (Erler 15)、これらの言葉は東ドイツ初期の政治

裁判にそのまま当てはまる。メラーなどのケースに限らず、このことを裏付ける事例は A. ヘルツや連邦司法省の書に多数収録されている (Herz; Bundesministerium der Justiz)。たしかに非ナチ化の過程で、西ドイツとは違って東部ドイツではナチに協力ないし追隨した従来の職業的裁判官が一掃された意義は大きい。けれども、社会主義統一党に忠実ではあるが専門的訓練の欠如した速成の裁判官に政治権力からの司法の独立を期待することはできなかった。その意味で、東ドイツの政治的司法は、ケーラーたちが反対した統一リスト方式による選挙と同様に、一党独裁の民主主義的装飾品にすぎなかったといわねばならない。F. ヴェアケンティンは近著の序論で、「不法国家という呼び方に反対する者ですら、ドイツ統一後に東ドイツが法治国ではなかったこと、東ドイツの文字に書かれた法はそこで支配する社会主義統一党には当てはまらなかったことを認めている」と記しているが (Werkentin 5)、ケーラー夫妻のケースは独裁政党への司法の従属の初期の例証になったのである。

5. 政治犯問題の今後

以上で東ドイツ成立期の政治犯の事例としてメラーとケーラー夫妻の悲運を本人の証言と息子ユルゲンの手記に即して跡付け、その注目点について考えてみた。2014年の現時点で数えると、これらの手記が公表されてすでに15年が経過した。また手記のもとになる文書がソ連の崩壊とドイツの統一でアクセス可能になった時点から数えても、4半世紀が経過したことになる。その間に独裁のために犠牲を強いられた人々の数々の体験記や回想録などがまとめられ、人の目に触れるようにもなった。確かにそれらの多くは、本稿で利用した文章がそうであるように、非売品として出版されているので一般の書店には並べられず、人目に届きにくいのは否めない。それでも数としては少ないながらもそれらが世に送られ、またそれらを活用した研究が世に問われるに至っているのも事実である。

このような状況はドイツ統一まではほとんど見られなかったことを考えるなら、大きな変化だといえよう。東ドイツが存立していた時期には、容易に推察できるように、成立期の政治犯の問題は体制の恥部と見做されてタブー扱いされ、公然と取り上げられることはなかった。一方、西ドイツでは重い蓋をされることはなかったものの、冷戦体制が緩んで平和共存の時期に入った1960年代以降、関心が向けられることは少なくなり、一般市民の視界からは徐々に消えていったのであった。K.-D. ミュラーが指摘するように、ベルリンの壁が崩れた「1989年までに関心を有する人々の広がりほとんど政治犯関係者自身の範囲にまで縮小した」(Müller (b) 9) のが

実情であり、この点では戦争末期から戦後初期にかけての避難民・被追放民の存在が社会の中で霞んでいったのと同様の経過が見られるといえるかもしれない (近藤 (e) 133)。ただ政治犯問題が被追放民の場合と違うのは、ドイツ統一後にシュタージ文書をはじめとする長く嚴重に秘匿されてきた情報が明るみに出され、監視と抑圧の実態が暴かれて大きな衝撃を社会に与えたという事情が存在する点である。これによりドイツの「第二の独裁」の暗部にメスが入られるようになり、第二の「過去の克服」が課題として浮上したが、その過程で希薄化していた「政治犯の知覚における転換」(Müller (a) 9) が起こったのである。非売品の形をとることが多くても、政治犯の手記などがいくつも公表されるようになったのはその結果であり、政治犯と彼らを生みだした政治的抑圧が研究の対象に据えられるようになったのも、そうした流れの中にあるといえよう。

ところで、東ドイツ研究の主流だった全体主義論的なアプローチに照らしてみると、本稿で試みた体験に即した研究には二つの意義があると考えられる。一つは、抑圧の仕組みを説明し、巨大な監獄国家として東ドイツを描くだけではそこで暮らした人々の苦しみ、願望、諦念などの生活実感が伝わらず、社会に内在する緊張関係が視野から抜け落ちるため、抑圧は支配のメカニズムに解消されてしまうことである。このことは、抑圧の面からだけではナチスと違って東ドイツが40年以上の長期にわたって存続できた理由を十分には説明できなくなることをも意味している。もう一つは、日常史的な研究ではともすると支配や抑圧の側面が希薄になりがちであり、その結果、1980年代に露骨な抑圧が緩むと出国申請が激増し、同時に弱体ながらも政治的反対派が形成された事実などが等閑に付されやすいことである。東ドイツについてはナチ・レジームと同等かそれ以上に全体主義的だったというイエッセやシュレーダーの見方から、その一面性を批判するヤーラウシュの福祉独裁やザブロウの合意独裁をはじめ、多数の市民が支配の一翼を担っていたことを重視するフルブロックの参加独裁という見解にまで至る大きな幅があるが (近藤 (a) 17f., 131)、そうしたマクロの把握の妥当性を検証するためにもミクロの視点に立った考察が必要だと考えられるのである。このようなアプローチは、日常生活に貫徹する支配の在り方を問うことを主眼にしており、日常史の視座から独裁の実像を把握する方法と言い換えることができよう。また、こうした視座からミクロの世界を重視する点では、グラックのいう「ミクロ過程論的転回」に発想としては近いといえるかもしれない (小野寺 (b) 24)。拙著でも触れたように、2002年に出版されたC. フォルンハルスたちの編著『正常性の外見』には「社会主義統一党独裁下の日常と支配」という副題が付されていた。しかし、そこでは支配と日常が別個に論じられ、焦点となるべき両者の交錯が正面に押

し出されていたとはいえなかった（近藤（a） 315）。これに対し、例えば本稿で取り上げたメラーが登場した2013年のパウツェン・フォーラムのシンポジウムではテーマとして「日常の中の独裁」が掲げられており、独裁と日常が並列していない点に決定的な違いがある。東ドイツ崩壊からしばらくは支配もしくは独裁に照準を合わせた研究が主流だったのに対し、これに対抗する形で次第に日常史的研究が有力になったが、そうした流れを振り返ると、「日常の中の独裁」という視座が成熟するまでには長い時間を要したことになる。さらにそうした視座に立って、ミクロの世界に内在することを通じてマクロの構造を浮き彫りにしようとする時、「ベルリンの労働者階級の家族から見た現代史」（コルドン 637）を描くことを目指したK.コルドンのベルリン三部作などが、小説の体裁をとりながら大きな転換期における日常世界の入り組んだ複雑な相貌を活写している点で、歴史研究への貴重なヒントを提供していることも付け加えておこう。

それはさておき、全体として見るならば、時間とともに東ドイツが遠のくにつれて、そうしたアプローチの土台となる手記などが新たに公刊されることはきわめて少なくなってきたという印象を筆者は抱いている。ドイツ統一後、シュタージの政治的犯罪を暴く観点から数々の貴重な証言や記録が公表され、東ドイツの成立過程についても暗黒面が明るみに出された。その代表例としては、特別収容所についての資料が発掘されたことが挙げられよう（近藤（c））。多方面でのそうした努力には、反共主義の立場から東ドイツを断罪する政治的意図が混じっていたのは否定できない。とはいえ、肝要なのは、美化や非難を超えて真実を突き止めようとする真剣さと熱意がこもっていた事実である。ムラスたちやケーラー夫妻をはじめ、抵抗運動の若者たちやシュタージによる拉致被害者の悲劇などが掘り起こされたのは、そうした努力の成果にほかならない。また本稿で触れたリンデンシュトラッセの収容施設が保存され、それ自体が拷問室のように見える監房を見学できることや、ベルリンのホーエンシェーンハウゼンや恐怖の的になったパウツェンの施設などが各地で公開されているのも、このような努力の一環といえよう。

けれども、ドイツ東部で東ドイツ時代を懐旧するいわゆるオスタルギーが浸透し（近藤（a） 301ff）、他方で、東ドイツ消滅後に出生するか成長した人々が増大するにつれて無関心が広がりつつある近年の状況に照らすと、ナチズムと並ぶ東ドイツの「過去の克服」は困難になっていく可能性が大きい。ガウク庁の通称で知られたシュタージ文書管理機関を率いたヨアヒム・ガウクが社会民主党と緑の党の推薦にキリスト教民主同盟・社会同盟が相乗りする形で2012年に大統領に選ばれたのは、東ドイツの独裁体制を倒した市民運動の出身であることから、この面では朗報のようにも映

る。また、しばしばドイツ統一が西ドイツによる東ドイツ併合だと批判されてきた現実を考えれば、ガウクの大統領就任により、ハンブルク生まれであっても東で育った首相のメルケルと大統領が二人とも東ドイツ出身という結果になったことは、やはり特筆に値しよう。しかし、それだけに翌 2013 年 9 月の連邦議会選挙の結果は重要な意味を持つ。なぜなら、社会主義統一党の系譜に連なる左翼党が、反原発を唱えて初めて 2011 年に州政権を手中にした緑の党を凌駕し、議席を喪失して議会から退場した自由民主党を尻目に第 3 党に躍進したからである。そればかりか、2014 年 12 月には左翼党に所属する初めての州首相がテューリンゲン州で誕生した。これらの結果は、いわゆるハルツ改革を起点とする福祉国家改革で深まった社会的亀裂と抗議の広がりやを反映しているだけでなく、同時に、オスタルギーをはじめとする東ドイツ地域の過去を巡る微妙な問題を表していると考えられる (Petersen; 近藤 (b) 138ff.)。今後の推移が注目される所以である。

参考文献

- Ahrberg, Edda, 60 Jahre Niederschlagung des Streiks am 1. August 1953 in Workuta, in: Friedrich-Ebert-Stiftung, Landesbüro Mecklenburg-Vorpommern, hrsg., „Facetten der SED-Diktatur“, Schwerin 2014.
- Bessel, Richard, Germany 1945, New York 2009.
- Borkmann, Lutz, Herr, wir stehen Hand in Hand, in: Sigrid Grabner/ Hendrik Röder/ Thomas Wernicke, hrsg., Potsdam 1945-1989, Potsdam 1999.
- Bude, Roland, Workuta. Strafe für politische Opposition in der SBZ/DDR, Berlin 2010.
- Bundesministerium der Justiz, hrsg., Im Namen des deutschen Volkes, Leipzig 1994.
- Decker, Andreas, Von Workuta nach Potsdam, in: Elke Fein u.a., Von Potsdam nach Workuta, Potsdam 1999.
- Eisel, Matthias, Einleitung, in: Friedrich-Ebert-Stiftung, Landesbüro Leipzig, hrsg., Widerstand gegen den Kommunismus, Leipzig 2013.
- Erlor, Peter, Besatzungsjustiz in der SBZ/DDR, in: Fein, Elke u.a., Von Potsdam nach Workuta, Potsdam 1999.
- Flemming, Thomas, Besatzer und Besetzte, in: Jürgen Engert, hrsg., Die wirren Jahre, Berlin 1996.
- Foitzik, Jan, Der sowjetische Terrorapparat in Deutschland, Berlin 2000.

Fricke, Karl Wilhelm/ Klewin, Silke, Bautzen II, Sonderhaftanstalt unter MfS-Kontrolle, Dresden 2007.

Fulbrook, Mary, The People's State, New Haven 2008.

Hattig, Susanne/ Klewin, Silke/ Liebold, Cornelia/ Morre, Jörg, Geschichte des Speziallagers Bautzen, Dresden 2004.

Herz, Andrea, hrsg., Nicht-im Namen des Volkes, Erfurt 2008.

Knopp, Guido, Die Kriegsgefangenen, München 2005.

Köhler, Jürgen, Mein Vater war schloßweiss, in: Sigrid Grabner/ Röder, Hendrik/ Wernicke, Thomas, hrsg., Potsdam 1945-1989, Potsdam 1999.

Der Landesbeauftragte des Freistaates Thüringen für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR, Todesurteile gegen Kinder: Erinnerung an 33 Eisenacher Jugendliche, die 1945 verhaftet wurden, Erfurt 1998.

Liebold, Cornelia/ Pampel, Bert, hrsg., Hunger-Kälte-Isolation: Erlebnisberichte und Forschungsergebnisse zum sowjetischen Speziallager Bautzen 1945-1950, Dresden 1997.

Möller, Harald (a) , „Wir durften nicht sitzen und nicht liegen, mußten den ganzen Tag nur immer laufen “, in: Cornelia Liebold/ Bert Pampel, hrsg., Hunger-Kälte-Isolation: Erlebnisberichte und Forschungsergebnisse zum sowjetischen Speziallager Bautzen 1945-1950, Dresden 1997.

Möller, Harald (b) , Zeitzeugengespräch: Widerstand und Haft im SED-Staat, in: Friedrich-Ebert-Stiftung, Landesbüro Leipzig, hrsg., Widerstand gegen den Kommunismus, Leipzig 2013.

Müller, Klaus-Dieter (a) , Einleitung, in: Hans-Dieter Scharf, Von Leipzig nach Workuta und zurück, Dresden 1996.

Müller, Klaus-Dieter (b) , Zur Einführung, in: Benno Priess, Erschossen im Morgengrauen, Calw 2002.

Petersen, Thomas, Das Ende der „Mauer in den Köpfen“, in : Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 19. 11. 2014.

Pickel, Kurt, „ ...hast du unterschrieben deine Urteil. “, in: Cornelia Liebold/ Bert Pampel, hrsg., Hunger-Kälte-Isolation: Erlebnisberichte und Forschungsergebnisse zum sowjetischen Speziallager Bautzen 1945-1950, Dresden 1997.

Plato. Alexander von/ Leh, Almuth, „Ein unglaublicher Frühling “, Bonn 1997.

Preissinger, Adrian, Todesfabriken der Kommunisten, Berg 1991.

- Priess, Benno, Erschoßen im Morgengrauen, Calw 2002.
- Räbiger, Rocco, „Allenfalls kommt man für ein halbes Jahr in ein Umschulungslager …” . Nachkriegsunrecht an Wittenberger Jugendlichen, Torgau 1998.
- Reinert, Fritz, Brandenburgs Parteien 1945-1950. Möglichkeiten und Grenzen kooperativer Politik, Potsdam 1995.
- Richter, Michael, Die Ost-CDU 1948-1952, Düsseldorf 1991.
- Scharf, Hans-Dieter, Von Leipzig nach Workuta und zurück, Dresden 1996.
- Schüler, Horst, Du denkst, es ist alles vorbei, in: Sigrid Grabner/ Hendrik Röder/ Thomas Wernicke, hrsg., Potsdam 1945-1989, Potsdam 1999.
- Schroeder, Klaus, Der SED-Staat, München 1998.
- Stiftung Sächsische Gedenkstätten zur Erinnerung an die Opfer politischer Gewaltherrschaft, hrsg., Spuren, Suchen und Erinnern, Leipzig 1996.
- Suckut, Siegfried, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, Bonn 2000.
- Uhlemann, Manfred, Entstehung der SED in Potsdam, Potsdam 1996.
- Wahl, Volker, Thüringen unter amerikanischer Besatzung, Erfurt 2001.
- Werkentin, Falco, Politische Justiz in der DDR, Erfurt 2012.
- Wiener, Horst, Anklage: Werwolf, Reinbek 1991.
- アン・アプルボーム、川上洸訳『グラーグ』白水社、2006年。
- ヘルマン・ウェーバー、星乃治彦・斉藤哲訳『ドイツ民主共和国史』日本経済評論社、1991年。
- 内村剛介『生き急ぐスターリン獄の日本人』三省堂、1967年。
- 小野寺拓也 (a)『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』山川出版社、2012年。
- 同 (b)「歴史研究の『ミクロ過程論的転回』」『歴史学研究』840号、2008年。
- パウル・カレル、畔上司訳『捕虜』学研、2001年。
- 木戸蓊『激動の東欧史』中公新書、1990年。
- クラウス・コルドン、酒寄進一訳『ベルリン1945』理論社、2007年。
- 近藤潤三 (a)『東ドイツ (DDR) の実像』木鐸社、2010年。
- 同 (b)『ドイツ・デモクラシーの焦点』木鐸社、2011年。
- 同 (c)「ソ連占領期東ドイツの特別収容所に関する一考察」『愛知大学経済論集』186号、2011年。
- 同 (d)「ソ連占領期東ドイツのキリスト教民主同盟」『社会科学論集』51号、2013年。
- 同 (e)「ドイツ第三帝国の崩壊と避難民・被追放民問題」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』20号、2014年。

同 (f) 「ソ連占領期東ドイツにおける社会主義統一党の成立と変容」 近刊。

笹本駿二『第二次世界大戦下のヨーロッパ』 岩波新書、1970 年。

高杉一郎『極光のかげに』 岩波文庫、1991 年。

高橋秀寿「敗北の『抱きしめ』方」『立命館言語文化研究』 19 巻 1 号、2007 年。

西義之『現代ドイツの東と西』 新潮社、1962 年。

原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』 講談社、1999 年。

メアリー・フルブルック、芝健介訳『二つのドイツ』 岩波書店、2009 年。

辺見じゅん『収容所から来た遺書』 文春文庫、1992 年。

付記

本稿の末尾近くで「日常史の視座から独裁の実像を把握する方法」の必要を述べたが、脱稿後に類似したアプローチを提唱する論考に接した。Jens Gieseke, Auf dem Wege zu einer Gesellschaftsgeschichte der Repression in der DDR, in : Erinnern, H. 1, 2012 がそれである。ここでは「抑圧の社会史」という呼称が使われているが、政治史を見据えた日常史と言い換えてもよいかもしれない。ただこのアプローチはスタートして日が浅く、成果はまだ少ないとギーゼケは付言しており、それがタイトルに「途上で」という表現が用いられている理由である。